

二葉亭四迷原稿
 平凡
 三

214
 4401
 3



大正五年十一月十日
遊川柳三郎氏贈

へ14
4401
5

特

平凡(二十一)ろ



二葉亭了

毎(まい)日(にち)こ(こ)の(の)中(ちゆう)の(の)中(ちゆう)学(がく)校(がう)を(を)終(お)り(り)ま(ま)で(で)前(ぜん)後(ご)十(じゅう)何(なん)年(ねん)の(の)間(ま)に(に)考(かん)へ(へ)て(て)

見(み)れ(れ)ば(ば)而(お)り(り)白(しろ)く(く)も(も)な(な)い(い)話(わ)ど(ど)が(が)、係(か)り(り)甚(し)く(く)と(と)大(お)體(たい)

に(に)思(おも)は(は)ざ(ざ)か(か)つ(つ)と(と)。小(せう)学(がく)校(がう)の(の)中(ちゆう)は(は)、内(うち)で(で)親(おや)に(に)

ル
ツキ
跡
け

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

ざんじと真顔で教へら小て、
 備馬鹿
 祈の中は全く相合せ得る物の大さは相
 等し
 ねが、幾行三南洲は尚ほ分らなかつた。
 起つてホツと一息吐く。代敷も分らなかつた。
 に強付けられれば、げんざうして、便所へ

には、頭も乱次まじり、無理方程式を無理
 れルに膠着いて離れない。次や不穩方程式
 と、aとbとが紛糾からて、何時迄経つて
 のは如何にかまうても、少し複雑のにも
 共通り。一次方程式、二次方程式、簡単な

(通し)

4

にすうのかと
研のかまやまは
不平だ
つとづ、
其中に
キ梅厚風

と聞いたや
切替の西瓜のやうな
切替の西瓜のやうな

二枚厚風を聞いとやうな
二面角が少く東
物せ
キ梅厚風を聞いとやうな
物が出て来

て、
大きながお供
お供が附着いてヤ

ツサモツサ
始め
なると、
もうき

逆上
つてうい、
丸呑にうせうれこギゴチな

い定義や定理が、
頭の中で
ちやちこ
ばうて

其心持の悪いこと
一通りでない。
試験が済

おと、
早速咽喉へ
突込
飲の莖水

と一
緒に吐
出せう
もの
吐
出して
つ

セキ

て汚くしたくする。

何の因果で此様な可厭な想をさせられる

本か、其は羨望分らないが、唯此厭な想を

忍ばなければ、學年試験に及第せんとて貰へ

ない。學年試験に及第が出来ぬと、教員の

目的物の卒業證書が貰へないから、それ

成り止むことを得ず、眼を開つて毒を飲

みで辛抱しと。

尤も是は数学ばかりでない。何の學科

も多少とし此氣味がある。味けうて劇しく

試しけん験けんのの為ためににといい小こぶぶ外ほかははふふいい。全ぜんくく甚しん次じ

何なにのの為ためにに學がく校こうへへ通つうつつののかかとと別わかかかれれはは、

今いまににりりてて考かんがへへてて火ひとと、無む意い味みららたた。

ニ葉、亭

平凡 (三十二)

むむとと、互たがいい吐はき出だししててケケロロリリとと忘わすれれててママカカ。

御ご付つかのの積つみりりでで、弟あにををににししてて、而しかししてて試しけん験けんがが濟す

ととかからら、狼あ狽わてて、片か端はしかからら及ま弟にいののおお呪のろひひの

暇ひまももないい。後あとかららくくとと他たのの學がく科かがが着せままて

ななどどいいふふののはは一いつつつももないい、又また學がくししああででああるる

の私わたくしの眼まなこ中ちゆうには試験しけんの外ほかに何物なにものも無なかつた。

試験しけんの為ために勉強べんきやうし、試験しけんの成績せいせきに一花ひと一愛い

し、如何いかなる事ことでも試験しけんに關係くわんけいの無ない事ことすら、

如何いかなる事ことも、
構かまはぬやうに見みて、
思おもひ、
生命せいめいの短たん

ど全部ぜんぶ部ぶを學まなびて試験しけんの上うへに頼たのじてみたか、

其その幼こ少せうの私わたくしの生涯せいがいか、試験しけんといふものを

私わたくしもつた、
跡あとは他ほかの人の煙けいのやうな物もの

にどうも、
あ、

これは、まかし、私わたくしばかりではなかつた。

級きゆう友ゆうといふ級きゆう友ゆうが皆みな然ぜんうで、平生へいせいの勉強べんきやう家か

あ

ア

でも尚ほ先済を感ずると、運動と稱して、

教師の私宅へ推懸けて行って、哀れッまい

事を言つて来る。

私は政信者の夢として、見整場の、負嫌

はだつたから、平生も~~不勉~~勉の~~方~~方では

らつと。無論馬が面白くては無い、

学神は何時迄行つても面白くも何ともない

バ、~~馬~~馬へ競馬へ引出された馬のやうなも

ので、同じやうな書と鼻を列べて見ると、

負~~の~~のが~~情~~情し~~で~~でいきり出す~~無~~無~~に~~に



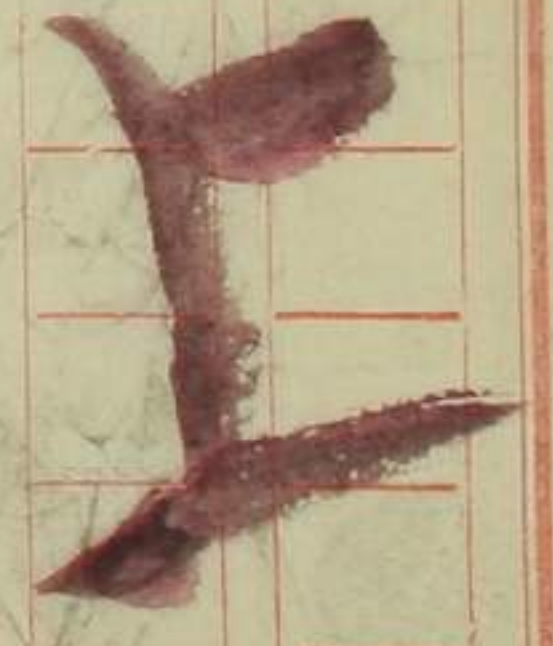
Handwritten annotations and corrections in the left margin, including characters like '情', '無', and 'に'.

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

式で押徹さうとす、又或程度は押徹さ
 研ぎのば数学の奴どが、その水と無理に鴉吞
 から得るもの神目では、是は心配はない。心
 術文に数学のしめだが、作文は小学時代
 る。又鴉吞で大抵間に合ふ。間に合はんの

いまさら出す。
 平生々々然とどから、試験とぶると、
 家並の狂人にぶらして、向鉢巻ばかりでは
 氷裳を頭へ載けて、其上から杖冠
 りとして、夜も目も眠らずに、例の鴉吞をや



て 躊躇してめし者はない。其中で一人其
 事と平氣で整頓に行つてめし一人とし
 が、世間を見渡すと、皆此無意味な馬鹿氣
 けらのが、何となく馬鹿氣と事に思をものやりし。
 其時、~~いふ~~ 學校教育ふんをい受

には、親の手前、~~反~~ 友の手前、流石に而月
 せぬ中、ふと其かゆ合を外して、落こち時
 を外すと、落こち。私も末ど試験慣れの
 へる。たし、是はかね合あひもので、そのかね合あひ
 ちかつとわら、少し學校がくにも厭氣いやが差して、

紙用稿原聞新日蜀京東

か
ん
事
を
思
ふ
の
は
何
ど
か
薄
気
味
悪
か
つ
か

ら
、
狼
狽
て
、
い
や
、
馬
鹿
氣
て
あ
る
や
う
で

も
、
矢
張
必
要
の
ま
じ
ら
う
と
思
ち
し
て
、

素
知
ら
ん
教
し
て
共
か
う
は
落
弟
の
恥
辱
を
雪
が

ね
ば
、
か
ぬ
と
、
切
齒
し
て
、
扼
腕
し

別
行
新
日
朝
京
東

帛稿原聞新日朝京東

て
、
果
し
眼
に
ぶ
つ
て
、
又
鴉
の
真
似
を
継
續
し

て
行
つ
し
、
鴉
の
真
似
で
も
何
で
も
試
験
の
成
績

せ
へ
良
ハ
ル
ば
、
先
生
方
も
満
足
せ
ら
れ
、
内

で
も
親
達
が
満
足
す
ら
か
ら
、
私
は
共
で
好
い
事

と
思
つ
て
あ
ら
、
然
う
し
て
多
く
學
ん
で
何
も
得



る所がない中、リフシウ中學校卒業して

卒業式には知事さんにも「**栄**」
今、**栄**の名譽

を荷うて、とりと。内でも赤飯を炊いて、

お月出度いくと、親達が右左から私を

かぬぞかにして呉れと。志てみれば、天

私も榮でお月出度ののと思つて、**私**

大に得意にぶらてり。



平凡(二十四)

二葉亭

中學校卒業した。今後は如何すこと

い小愈し脳の連轉く問題にぞうた。

中學校に在る頃の生活で

以下同致
相違

平凡(二十四)

二葉亭

中学卒業した。今後は何すこと

小愈し脳の転く問題にたつた。

問題

まじい
中
子
に
あ
る
頃
か
ら

の
う
ち
で

以下同致

寝てゝ寝めてゝ是ぢかりは

の俗字の夢にも入らず忘るゝ暇もなかつ

しめだが、中学を卒業してもまだ

に成すのだ。

源義経のめのは私では無い。私は疾うに源義経

無論東京に行く。

東京のいふことは如何なる處か、人の噂に

聞かぬかりで能くも知らざらば、私も仕方

の昔年(せいねん) 誰(たれ)も思(おも)ふやうに、東京へ

出て行くのか、学校へ入りたるすれば、黙つ

てゐても自然と運が向いて来て、或は海外

留学を命ぜられしか
知れぬ。若し然らば
留學しし時

朝し
とらんと、目を開いて夢を見てみるの

も昨日や今日の事ではないから、何でいふ角で

も東京へ出たといのどが、
さして困つた事には、
びらうしくもない

全の心算が
な。でどろろ

父は其次郎徳のし使であつた。
薄給で

かつが一家を支へてゐるので、
月給どけ

では私を中へ入ら
ますら
取れ

のどが
知れぬが、
幸ひ親譲りの地所が

少々と小さい家か
軒あつとめで、
其上

紙用稿原聞新日朝京東

りで如何にか新うにか物達だらうてあつた。

どから到致し私を東京へ遣はれないといふ

父の言葉に無理はないと思はぬでもないが、

志かし：私は矢張り東京へ出たい。

父は甚だあど五十であつた。遠慮する人ど

紙用稿原聞新日朝京東

けは氣も取らなかつた、まじく十年や十

五年は大丈夫生かしてあつた、信の私達も思

つてろとし、自分も其は、~~其~~其氣をあた。

從て世間の親達のやうに、早く私を月給取

にして、嫁を家づつて、孫の世話でもして

ないが、志かし、そのほどからお前まへは縣あがたへ

勤つとめ、などとして、何なにもの事ことも、いんじんはなして笑わらはれと、

言いえられた時ときには、情なさけなかつた。又または然しかうし

て置おいて、何なにぞ他にほかに氣きまぬ折をれぬ力ちから相あ意いの

事ことをして、いしやく縣あがたの方かたは、いしやく辭いしやく職しやくする、いしやく辭いしやく職しやく

しても當あたるは、お前の世よ話わには、あつまいと、

灯あかり亮りやう相あ意いの、いしやく後ごに、いしやく私わがの、いしやく方かたを、いしやく思おもつて、い

ふのは、解わかつてあつたけれど、志こころかし、私わがは、如何いかに

して、いしやく久ひさし、いしやく東とう京きやうへ、いしやく出でて、いしやく何なに處ところの、いしやく学がく校がうへ、いしやく入いり

とい。

紙用稿原聞新日朝京宗

へ、親子一つ事を及ぼすばかりで何日経ても
 纏らぬ中に、同家何某はもう
 二三日前に上京したし、何某は此月末に上
 京すといふ話も聞く。私は氣が急ぎない
 から、眼の色を異へて、只に通る果は血

紙用稿原聞新日朝京東

氣に任せ、口惜しゆれに、金がないと言
 へるけれど、地を賣れば海軍軍使は如何
 にかどうさうなもめど、それも私の將來よ
 りも地蔵の方が大事さう、監査は出して貰
 へん、好い、旅費どけ都合して貰ひ

たに、^其私^は上京して^其苦學^生に^なると、^其家^形

事^を言^ひ出^せば、^其父^は苦^学事^には^同意^を

が^少来^ぬとい^ふ、^そハ^そ別^じ、^いや^同分^を

●) ^いとい^ふもの^どと、^親子^款を^赤めて^角

芽^えつ^つ別^じ、^母が^おろ^くす^とい^ふ小^さな^事。

其^時分^の為^には^部令^のぬ^い事^があ^つと。

私^と同^期の^卒業^生で^又も^怨意^にす^と去^る家^に

の^息子^が、^何處^のも^無く^東京^行き^を望^むで、

親^に拒^めて^自暴^を起^し、^或夜^宿に^者金^を

を^偷出^して^東京^へ出^奔す^と、^續いて^二人^を

紙用稿原聞新日朝京東

存外ぞがいん 遠とほく 聴きて、
神かみ 家いへに 上あがる 事こと
にやうと 時ときの 嬉うれしさは 今いまに 忘わすれぬ。

紙用稿原聞新日朝京宗

程ほど 共とも 嫌きらみに 使つかふ 者もの 出でこの 以もつて、 同おなじ 極たぎな 息いき
子こを 持もつと 語ことばの 親おやの 大だい 悲ひ 懐なつを 送おくす
父ちちは 此こゝ 一ひと 件けんか ら 急きふに 我わがを 祈いのつて、 非あちこち 其そのの 親おや
歌うた 相あひ 談だんに 行いつて 法はつ 果くわ、 金かねの 二ふた 而らが 漸やく 出で
来きて、 最さい 初しは 甚しく 行ゆき 世よの 悲かなしめ 遊あそ 學まなの 類るいも、

平凡二十五

回中

ニ世ホム

念しゅつごこたじろ坐たじろ芝たじろのたじろあるたじろ白たじろとたじろやたじろうたじろたたじろ。ま待まちまにま待まらまこま

其ま日までまはまあまくまけまハまどま、ま今まとまやまらまてまはま妙ま行まやま

らま一ま日ま位まはま返まばましまてまもま好まいまいまやまうまなま東ま心ま指ま

気の高みで
御機嫌よう！と

一禮する、
律が出、こから、其

佳面になりて、
眼入濡紙を貼

何と後、
引かれ、やうで

俣が、
一寸、
振向いて

見きら
まど
前に
悄然と

見えと
か

流し

平気な
として
を
め

心
を
ら
して
め

紙用稿原聞新日朝京東

川^{あし}梁^みの^{まち}町^とを^ぬぬ^る道^ちぎ^て侍^かの^ま車^まの^ま着^る。

~~川梁の町をぬぬる道ぎて侍のま車のま着る。~~

い^うし^て冷^{たい}朝^の風^を受^けて^行く^の

こ^う行^きて

と^好い^気持^のも^のじ^と思^つて^もみ^と。

か^い、^使う^杉垣^の所^を出^立れ^て

娘^のな^ま通^りへ^出し^次には、自^然と^心の^平均

と^は知^らま^い。末^年の^暑中^休暇^に、東^京帰

え

り^の割^服を^見せ^とら、驚^くじ^らう。ソ^ヤ、

其^時分^にや^嫁に^行つ^て糸^子家^にや^居る^か

が^あら^うと^妙な^事を^思つ^て、こ^と氣^が附^いて

赤^面と。

紙用稿原聞新日朝京東

~~解は傳を~~

まじ芝車に後程向が

場内中

あふつに、もう一杯の人でいず進ったり居

作りとほついで、親しく終がしいので、父

が又狼狽と出す。親しい友、~~中~~見返り

に束て呉れと。其面を見すと、~~秋~~は急に元

気がついて、~~を~~倒れ

よく吐き候とつと。何じが咄が

秋の舉動に注目してあふやうに思け

無論互言は、~~立~~際泣いこと

と知る笑はふいから

寝て、
汽車に乗る。
時刻に
汽車に乗る。

手巧無沙汰な
汽車に乗る。
汽車に乗る。

が鳴る。
私が家から音を出して
検

機をすく時、
動出して、
父の服を

よばつめせと
顔が
りとして
直ぐ後

に見えなくさ。
白ペレキの
低い

其向ふの
後向きの
靴

二階家が
平家が
行側所

人や車が
後へ
のが可笑しいと、

見ても
中
に
田圃に
さうし。

眼と放つて見渡すと、城下の町の一角が

屋根は黒く、壁は白く、雑然と現まらして見

え、向ふに、城の天守が、
生れて以来十九年の間毎日仰ぎ嘆と

仲に、送てあつて。あ、家は彼下と思ふ

時、
を離れ、この心の細さ、身に流れて

情然とし、情然とす、側から、妙に又氣

悲しいやうでも、お水は、又勇ましいやうで

何ぞ、
何ぞ、
籠のやうな狭隘しい處から、

茫々と、
茫々と、
空のやうな處へ放されて飛んで

行くやうで、
何となく心臓の、
うやうや

氣もすうが、
又、
明、
い橋、
快

88

又何處か暢びりと、急に

借北まが延び

とやうな、
氣もす。

妙な心算にやうと、
心算に家の方角を見

てふこと、
忽ち磁石と磁針を鎖と小
汽車

は、
土下を行く

平凡二十

ニ世小島

申後れたが、
私は法政を研究のため上京す

の
だ。

其次の青年に、
政治ではない、
政論に

味を持たん者は幾ど無^{かつこ}。新し^{わし}中学に居^ある

頃から甚^おう面白^{おもしろ}くて、政黨では自由黨が大

の^{ひい}見負^いであつたから、自由黨の名士が遊^{あそ}び

に来れば、必ず其演説^{を聴きに}へ行つたものぢ。

無論^{むろん}板垣^{いっぺん}さんは自分のおめさんか何ぞのや

うに思^{おも}つてゐた。

實際の政界の事情は乗^ち請^{しん}分つてゐるよか

つ。自由黨は如何いふ政黨じやう、改進黨

と如何違ふのじやうか、其^{その}事^{こと}は紙^かつてある

やうな風^{ふう}をして、~~其~~實^{じつ}は紙^かつて分^わつて

れで好きだった。

好きは好きだったが、志かし友人の誰彼

のやうに、今直ぐ視を振るし、~~手~~が共伸

其真似は仕なぐない。

入すて必~~修~~の生端を行ふのむは行どり

信~~証~~んや~~ど~~、相~~信~~ん~~と~~も~~真~~証~~に~~れ

が~~あ~~り~~し~~行~~は~~行~~は~~り~~し~~か、もし~~少~~く~~先~~の事に

しと~~い~~ひ、免~~論~~理~~恐~~といふものは遠~~方~~か

う~~あ~~ら~~め~~て~~憶~~憬~~れ~~て~~あ~~る~~限~~、~~十~~直~~ぐ~~実~~行~~す

種~~々~~神~~名~~の悪~~い~~事~~が~~あ~~る~~。が、行~~は~~れ

何~~ん~~ぞ~~う~~、薄~~志~~弱~~行~~のやう、何~~ん~~

いふ心持が悪く、或時何れの學術雜誌を

讀むと、今の青年は自己の當分修むべき學

業を喜んで、動もすれば身を政治界に投ぜ

んとすゝ風ありと雖も、是れ以の外の心得

と云ふ、吾人は須らく客氣を抑へて先づ大

に修養すべし、大に修養して而して後大に

為す所ありべし、といふ議論が載つてゐる。

私は嬉しかった。早速此持重説を礼物にし

て送つた。實行に逸る友人等を非難し、

而して友人等を非難するは自ら辯護し、

紙

斯ういふ事情で斯ういふ場合に於て

申す卒業後尚ほ進んで何か専門の

學科を修めやうといふ場合には、執力ひ政

治學に傾かざるを得なかつた。父が上京し

て何と違ひたいのじと云つと時にも、言下

に政治學と答へと。飛んじまじとりつて父

が政治學では如何して學知して笑はるか

ア、いから、ぢや、法學と政治學とは從兄弟

同志、法學をやりといと云つて見と。法學

する料にしてゐる。

律り
學は
其
流
行
の
學
問
と
し
、
原
の
書
記

官
心
法
學
士
と
し
、
そ
れ
に
親
戚
に
、
私
立

ど
け
れ
ど
法
律
學
校
出
身
で
、
現
に
新
清
の
服
に

は
立
派
な
生
活
を
し
て
ゐ
る
人
が
二
人
あ
つ
と
。

一
人
は
、
何
處
と
ら
と
ら
の
記
憶
が
な
い
が
、
何
で

も
何
處
か
の
地
方
で
代
言
と
し
て
、
執
着
を

女
房
に
し
て
贅
澤
な
生
活
を
し
て
ゐ
る
と
い
ふ
情

令
一
人
は
内
務
省
の
局
官
で
こ
そ
あ
ら
、
好
い
處

を
勤
め
て
ゐ
る
證
據
に
は
、
當
て
帰
省
し
と
時
の

服
装
を
見
る
と
、
地
方
で
は
差
任
官
に
は
大
お
夫

瑞ふめらのゆ ~~作~~素す晴はらしいい 服ち袋りで、何なにしてもも金きんの

貯ち計けいををふらら無むげげてておおとと云いふふ。それそれでで父ちちも

活けつ律りつばら好よかかららううとと 納なつ得とくししののでで、
新あたらはは法ほう 法ほうに

学がく不ふ定ていののたためめ新あたらううしてして汽き車しゃでで上あ京きやうすすのの のた

平凡 (二十七)

二葉亭

東京とうきやうへへ着ついたいたのはのは其その日ひのの午ご後ごのの三さん時じ次じど

つたが、例れいのの金きんの時とき計けいををふらら無むげげてておおとと

いふ、新あたらのの家うちととはは遠とほ縁えんのの、
庭にわはは苗やう字じだがだが、

紙用稿原聞新日朝京東

小狐三平といふ人の家だ。お魂社の裏手の

知れ難い家で、車庫を敷きこぼされて、

と尋ねると、門構は門構ど、潜

門で、園で想像してみとやうな立派な庭木

門で、園で想像してみとやうな立派な庭木



紙用稿原聞新日朝京東

達か、いかに、潜り、開けて、中を、入ると、

直ぐ、其處が、枯み、仰りの上り口で、

内を、うて、漸と出て来た、たのぼ、

瞳、いどやうな、美い女、おは、膝を、

うど、つとが、おの、風体、を、見、て、申、止、に、し、て、

三度四度

紙用稿原聞新日朝京東

之 し
ち ち
か か
ら ら
、
何 なん
び び
す す
と と
い い
ふ ふ
。 。
は は
て て
な な
、 、
家 うち
を を

向 ま
違 ちが
へ へ
し し
か か
知 し
ら ら
と と
、 、
一 いち
寸 すん
狼 ろう
狽 たい
し し
と と
が が
、 、
標 へう
札 さ

に に
確 たしか
二 に
小 こ
狐 こ
三 さん
平 へい
と と
あ あ
つ つ
と と
二 に
違 ちが
ひ ひ
な な
い い
か か
ら ら
、 、

姓 せい
名 な
を を
先 ま
っ っ
て て
今 いま
着 ま
い い
た た
こ こ
と と
を を
言 い
ふ ふ
と と
、 、
美 み
い い

女 に
は は
怪 け
訝 い
な な
敷 敷
を を
し し
て て
、 、
一 いち
寸 すん
お お
侍 ま
ち ち
お お
さ さ
い い
と と

言 い
事 う
し し
引 ひ
込 こ
め め
ぎ ぎ
り り
、 、
中 ちゆう
心 しん
出 で
て て
来 き
か か
い い
。

車 くるま
屋 や
は は
早 はや
く く
仕 し
て て
美 み
々 々
と と
い い
ふ ふ
。 。
私 わ
は は
氣 き
が が
氣 き
で で

な な
い い
。 。
が が
、 、
前 ま
以 も
て て
書 し
面 めん
で で
、 、
世 せ
話 わ
を を

被 ひ
ひ ひ
、 、
引 ひ
受 せう
け け
と と
と と
、 、
涙 なみだ
が が
、 、
纏 まと
う う
て て
、 、
巾 きん
着 ぎ
の の
ど ど
し し
、 、

今 け
日 ふ
上 じやう
京 きやう
す す
ら ら
車 こ
も も
三 さん
日 じ
も も
前 ま
を を
知 し
ら ら
せ せ
て て
あ あ
ら ら
、 、

紙用稿原聞新日朝京東

今子伯母さんか
私は家で伯母さんと

言ひつけておと
伯母さんか出て来て
好

いやに仕て笑はると
昔を頼み

してろくと
久らくして伯母さんではなく

て、今の女が
み出て来て、お上りなさいと

いふ。茶物が
ありませんと、口を尖がらす

と、茶物
はあらお出しなさいといふか

ら、車屋に手傳つて
茶物を玄關へ

運び込
其女が片端から
取つて、ズ

ン
何處か一掃つて
しまつと。

東京朝日新聞原稿用紙

此家の夫人と

ところ
定むと思つと。

黙つて御立つて

少尉との
函着を
見てる
と女が、
共

が濟むのを待
とやうに、
来いと

ぬむかりま
いふかう、
其跟に随いて
去

の次の落
際い
間へ入ると、
正面の
唐紙を
女

が
此時むかり
は一寸膝を突
いてスツと
開け

で、
黙つて
私の顔を
私に
私に

中へ入つて
と好い
んですか？

と
娘
服
案内の
女に

應接

時、
衣紙の向
ふで、
氣取
女の

から、
神しん らう びん
して、
卒然そつぜん 吾處ごこへ勝かちを突くと、
トサリと

真紅まっかにざらて、
倒たふささにざらて、

下したに
おめましてし

平凡へいふん (二十八)

二葉亭

泊とど世よ を び
— し り あ て は 何 い の 調 和
が要よ わ

い、
真ま ん こ う は 一 寸 會 釋 して、
ちよつとゑしやく

今いま お 着 せ し か が

云々

「は」と国くぢる。

「何ですか、お国では阿みさんも阿母と

んもお交りはありませんか？」

「は。」

七矢張回くぢるぢがう、
お弁でホワリホ

ツ目と雨の言傳を述べると、
奥は聴い

てのうか、
ないのが、
と調子ではあ

「あ」と受けぢがう、
厭に赤ちやけと出がら

しの葉を一杯注いで天れとぢり、
一向構

「つて呉れふい。気が附りて見ると、
座席も天れて
行方も違つて
一向構つて呉れない。

何時迄通つても主人が秋をみせぬので、
僕も手探しの法でいこう。

「伯父さんはお留守ですか？」

と不意に言つて了つた。か

「あ、伯父さんぢやないか？」
「秋をみせぬので、僕も手探しの法でいこう。」

「伯父さんぢやないか？」
「秋をみせぬので、僕も手探しの法でいこう。」

「主人はまじい後方から返けません。」

主人と僕に力を入れて言はれて、ぢや、

「伯父さんぢやないか？」
「秋をみせぬので、僕も手探しの法でいこう。」

又私は其紅にやうし。

ところへバタ／＼と
「伯父さんぢやないか？」
「秋をみせぬので、僕も手探しの法でいこう。」

天

紙用稿原聞新日朝京東

又倒さにとらて
 又真紅にいらし。
 雪江さんし一すお辞儀しとが、直ぐと彼
 方を向いてりつて、
 秋厭よの
 阿母さんか彼お事言らて行い

紙用稿原聞新日朝京東

古屋さんの何と。
 此方が何と、阿みおからお話があつと
 といつて雪江さんは此を向いとかし、
 此處らでお辞儀とすとのいらうと思つて、
 上さう。

紙用稿原聞新日朝京東



つ		と	か	
て	つ	行い	う	て
彼	ど	か	と	厭 ^{いや}
か	つ	な	い	だ
な	て	か	ふ	あ
窓	仕	つ	ろ	、
居	方	し	た	私 ^{あたし}
な	が	ん	、	に
處	な	ん	ア ^ア	だ
へ	か	じ	サ ^サ	か
行	つ	か	さん	ら
く	こ	ら	が	此 ^{この}
よ	ん	に	彼 ^あ	前 ^{まへ}
か	ど		か ^か	の
、	わ		な ^な	日 ^ひ
世	ね		事 ^{こと}	曜 ^曜
居	。		い	に
へ	私 ^{わたし}		つ	行い
行	ど			

六

い
づ
か
つ
し
も
ん
ど
か
ら
こ
し

ないから。

なら、
何なにも強つよひして買かつて上げやうとは言いは

「そんならお止とまさいな。尋常じんじょうので厭いと

嬌しな態なをすう。

「じつてえ、尋常じんじょうのぢやあ、と甘あまいれこ

すか

ッて、昔むかしは髪かみ澤さわな事が阿あみゆかに殺ころすま

「不ふ好こうませしく、ルビー入りさんぞ

~~笑わらひながら~~ルビー入りよ。

ちよいとく、其その代かり、と小こ浮う母はにやうて、

「あら！」と忽ち機嫌を換ねて「だから

母さんは嫌ひよ。直ぐあしどもの。尋常

のぢや厭じうて誰も言つてやしくつてよ。

「そんなら、其れは不逞らしい事お言ひ

でよい。

「へえ〜、岩れ入り事〜」と羨望し

て「守りやめでもないから、峠度よ。阿母と

ん、欺しちや厭よ。

「誰がそんな〜」
て一寸私を面を見

「まあ、好かつし〜」と羨望した。

✕ 十

